

幸水の花そうのタイプと盲芽の発現に関する研究

末次 信行(佐賀県果樹試験場)

SUETSUGU, N.: Studies on the Types of Flower Clusters and Occurrence of Dormant Buds of Japanese Pear "KOSUI"

幸水の栽培上の問題点の一つとして盲芽の多発があげられる。盲芽の多発は側枝の維持を困難にし生産力の低下を伴う。そこで、幸水における盲芽の発現と生態的特性としての花そうのタイプとの関連について検討したので、ここに報告する。

1. 材料及び方法

幸水及び二十世紀を主体に、場内植栽の主要6品種について1975年より1978年までの4年間にわたり、品種、主枝・亜主枝及び側枝上の位置、側枝及び短果枝の齡、花芽の大きさなどの相違による花そうのタイプ別着生率を把握するとともに、1978年には幸水及び二十世紀について花そうのタイプ別盲芽発現率を調査した。

2. 結果及び考察

1) 花そうのタイプ別分類と品種間差異; 主要6品種の花そうは副芽の有無及び形態により6タイプに分類された。さらに、これら6タイプは正常花(I~II)、子持花(III~V)及び副芽葉を欠く花(IV~VI)の3グループに分類された(第1図)。幸水はI型及びIII型、IV型が少なく、V型及びVI型が多い傾向を認めた(第1表)。

2) 主枝・亜主枝及び側枝上の位置と花そうのタイプ; 主枝・亜主枝の先端部ほどV型が多く、I型が少ない傾向を認めた。側枝では基部ほどVI型が多い傾向を認めた。

3) 側枝及び短果枝の齡と花そうのタイプ; 一年生側枝すなわち腋花芽ではV型及びVI型が少なく、II型が多い傾向を認めた。また、7~8年生の古い短果枝でもV型及びVI型が少なく、II型が多い傾向を認めた。

4) 短果枝花芽の大きさと花そうのタイプ; 花芽の大きさが大なるほどV型が増加し、小になるほどVI型が増加する明瞭な傾向を認めた。又、二次伸び花芽は短果

枝花芽の大と同様の傾向を示した。

5) 花そうのタイプと新梢の発生及び盲芽の発現; V型及びVI型における新梢の発生は極めて少なく、結果としてV型で48.9%, VI型で97.9%の盲芽発現を認めた。なお、二十世紀ではV型で0%, VI型でも68.2%であった(第2表)。

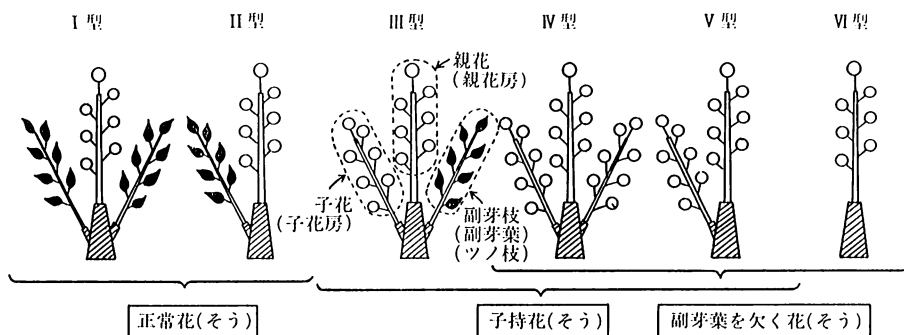
6) まとめ; 幸水は盲芽となりやすいV型及びVI型の花そうの着生率が高いとともに、同一タイプの花そうでも二十世紀に比し盲芽となりやすい傾向があり、これが樹全体における盲芽の多発を促し、側枝の維持を困難にしていると推察された。

第1表 花そうのタイプ別着生の品種間差異(1976~1978)

	新水	幸水	豊水	二十世紀	長十郎	新興
	%					
I型	9.0	2.2	16.8	14.1	16.4	43.4
II	50.3	49.1	38.4	49.4	61.5	46.4
III	7.0	1.3	9.6	10.9	3.1	5.6
IV	1.8	0	2.6	0.8	0.8	0
V	21.5	22.9	17.6	17.3	9.0	0.8
VI	10.5	24.7	15.2	7.7	9.4	4.1
調査数	400	459	388	689	555	544

第2表 花そうのタイプ別盲芽発現率(1976~1978)

		I型	II	III	IV	V	VI
幸水	タイプ別着生率(A)	2.2	49.1	1.3	0	22.9	24.7
	同上盲芽発現率(B)	0	0	0	—	48.9	97.9
	(A)×(B)	0	0	0	0	11.2	24.2
二十世紀	タイプ別着生率(A)	14.1	49.4	10.9	0.8	17.3	7.7
	同上盲芽発現率(B)	0	0	0	0	0	68.2
	(A)×(B)	0	0	0	0	0	5.3



第1図 花そうのタイプ別分類